岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第19号
Bulletin of Morioka Junior College Iwate Prefectural University, No.19
67－73, March 2017

研究報告

高校での世界史履修に関するアンケートのテキストマイニング分析

A Text Mining Analysis of Survey Data regarding World History Courses in Japanese High Schools

小川知幸[*1]，吉原秋[*2]，小川春美[*2]，鈴木道也[*3]，安井萠[*4]，畑奈保美[*5]，津田拓郎[*6]
Tomoyuki OGAWA , Aki YOSHIHARA , Harumi OGAWA , Michiya SUZUKI , Moyuru YASUI , Naomi HATA and Takuro TSUDA

Keywords: *World History Education, Liberal Arts, Text Mining*
世界史教育，教養教育，テキストマイニング

1. はじめに

平成18年（2006）に高等学校における必修科目の未履修（履修漏れ）が全国的な話題となった。その背景としては、平成6年（1994）学習指導要領における新しい学習観にもとづく社会科の地歴・公民科への再編と必修化、また選択科目の充実をめざしたカリキュラム再編による指導内容の増加とそれに応じた授業時間の不足などが指摘されたが、とくに大きく取り上げられたのは必修科目である世界史の学習にたいする是非であった。そもそも高等学校における世界史必修化は、小・中学校における日本史学習の重点化に対応する措置であった。文部科学省（2006）によれば、伊吹文明文科大臣（当時）も平成18年11月8日の衆議院・文部科学委員会において、「必要最低限の学力と教養のレベルというものを学習指導要領は示している」と答弁している。しかし高等学校では大学入試センター試験においてでさえ選択されることの少ない世界史に、限られた授業時間を十分に割くことはできなかったというのが真相であろう。大学入試の、用語の暗記力に依存した出題のあり方も問われた。また、日本史こそ必修化すべきであるという意見も根強い。

このような指摘を受けて、日本学術会議は、平成23年（2011）8月に「グローバル化に対応した時空間認識の育成」との副題のもとで世界史未履修問題発生の背景を分析するとともに、世界史Aと日本史Aを統合した「歴史基礎」科目の新設を提言した。次いで、同会議は平成26年（2014）にも「再び高校歴史教育のあり方について」として、この「歴史基礎」のカリキュラム試案を提示した。その翌年から中央教育審議会でも「歴史総合（仮称）」の新設を視野に議論を進めたことで、日本学術会議はその内容を懸念し、さらに平成28年（2016）5月に「『歴史総合』に期待されるもの」として、時代をこえた抽象的概念で総括するような歴史の学び方ではなく、ある程度（7つ）の時系列に沿った区切りを設けながら主題学習を採り入れるよう提言した。

さて、長い前置きとなったが、平成28年8月に中央教育審議会は、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」を発表し、そこに共通必修科目として「歴史総合（仮称）」を設置し、これを発展的に学習するための選択科目として「日本史探究（仮称）」「世界史探究（仮称）」を設置することが適当である、と明記した。カリキュラムはまだ明らかにされていないが、同報告には「歴史総合（仮称）」は、近現代の歴史の大きな転機「近代化」「大衆化」「グローバル化」に着目させるとあり、一方で日本学術会議の提言では、(1) 16世紀以前、(2) 16～18世紀、(3) 18世紀後半～1890年頃、(4) 19世紀後半～20世紀初頭、(5) 20世紀前半、(6) 20世紀後半、(7) 20世紀末以降という時代の区分けがなされているので、いずれも近現代を中心とした学習内容であることに違いはないだろう[1]。他方「歴史総合」の上位に位置づけられる「世界史探究」は、「世界の歴史の大きな枠組みと展開について、地理的条件や日本の歴史と関連付けた理解」とされている。

2. 高等教育のあり方の改善に向けて

ところで、われわれの研究会では、とくに世界史（外国史）に重点をおきながら、現状の高等教育のあり方を改善し、次世代の研究教育の人材育成をも視野に入れた活動を開始しており、いわゆる高大連携の取り組みや、筆者の一人においては、小中学生を含めた初等・中等教育へのアウトリーチ活動などにも手を染めている。高等教育とはそのような初等からの学習の積み上げを前提としているからである。

しかし他方で、近現代史中心の、あるいは「日本の歴史と関連付けた」外国史の理解がいったいどのようなものになるだろうか、という不安もある。川井正士（2010）は、現行より一つ前の学習指導要領にもとづく中学校歴史教科書において、それ以前と比較して削減された事項を以下のように示している。すなわち、(1) 古代ギリシア・ローマ史、(2) 中世ヨーロッパ史のほぼ全部、(3) ユダヤ教・イスラーム世界、(4) ヒンドゥー教の成立過程、(5) 「ルネサンス」の内容、(6) イギリス市民革命、(7) 社会主義、(8) 奴隷貿易・奴隷解放宣言、(9)

[*1] 東北大学、[*2] 国際文化学科、[*3] 東洋大学、[*4] 岩手大学、[*5] 東北学院大学、[*6] 愛知県立大学

アジア・アフリカの独立、の９つの事項が削減されたという。生徒たちが「イスラーム教の名も、アラーも、マホメットの名も知らないまま、同時多発テロやイラク戦争のニュースに遭遇する」ことを高校教員として危惧し、「身近な教材を利用し、生徒たちに学習効果を実感させ、学習意欲を喚起する必要がある」としている。そこで、いわば雑学の範疇であるが、生徒の印象に残るエピソードを都度挿入することで自発学習のきっかけを作ろうとした。われわれも、授業の「脱線」とおもわれる内容がいつまでも記憶の底にこびりついて離れないような経験をしたことがあるだろう。「脱ゆとり」といわれる現行学習指導要領も、指導内容や必要な授業時間を増加させたとはいえ、このような事態が大きく変わったとはいえないのではないか。

高等教育とは、既存の知識の修得にとどまるものではなく、みずからの発見であり、新しいものを生みだす力へとつなげることでもある。次期学習指導要領のもうひとつのトピックは、「アクティブ・ラーニング」の導入である。文部科学省は、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」であると定義する。加藤信哉・小山憲司（2012）は、これをラーニング・コモンズ、ライティング・コモンズ、リサーチ・コモンズの３つの場に分類し、大学図書館の機能拡張の必要性を説いているが、後藤芳文・伊藤史織・登本洋子（2014）にみられるように、一部高校教育の現場においてもすでに実践されている。私見によれば、リサーチ（調査研究）水準のコモンズにおける、とくに嚮導者との機能分担をなお課題としているようにおもわれる。

したがってわれわれの関心は、高等学校在学者、また比較的早い年次に在籍する大学生が歴史、とりわけ外国史の学習にたいしてどのような印象を抱いているか、また、大学の学習（研究）環境にどのような期待値をもっているか、という点にある。われわれの研究会では、平成27年（2015）に質問紙形式による「高校での世界史履修に関するアンケート」を企図し、おもに会員の本務校の担当授業において順次実施した。筆者は、みちのく図書館情報学研究会の主幹である吉植庄栄氏の協力により、東北大学、近畿大学、山形県立米沢女子短期大学、尚絅学院大学、そして仙台徳洲看護専門学校の５つの大学・短大・専門学校においても同アンケートを実施する機会を得た。本稿では、上記の関心から、これらのアンケートの調査結果をテキストマイニング手法により分析する。質問紙には一部自由記述欄を設定しており、定型化されていない文章の集まりをコンピュータによって自然言語解析する手法が、分析者の恣意的な取捨選択よりも適当だと推定されたからである。

3. 基礎データと集計結果

もとより、齋藤朗宏（2011）によれば、テキストマイニング手法は多くの学術分野で応用されているが、システムを目的に応じて作り替えることは困難であり、その場合、単語間の関連や単語と属性の関係を見るという段階にとどめざるをえないとして、限界も指摘されている。そのため、まず実施校の基礎データと数字による集計結果を提示しておく。

最初に、東北大学は明治40年（1907）に設置された東北帝国大学を母体とする総合大学であり、所在地は仙台市。学生数は学部学生に関していえば11,052名（平成28年5月現在）である。アンケートは平成27年（2015）5月26日に全学教育科目において、第1セメスターの学生にたいして実施された。実施者は東北大学附属図書館情報サービス課参考調査係長吉植庄栄氏である。120名の履修者のうち46名から回答があった（38%）。

次に、近畿大学は大正14年（1925）に創立した大阪専門学校と昭和18年（1943）創立の大阪理工科大学を基盤として昭和24年（1949）の新学制により設立された私立大学である。所在地は東大阪市。現在の学生数は 32,322名（平成28年5月現在）。14学部からなる大規模校である。アンケートは第1回として経済学部経済学科2年生、また第2回として同2・3・4年生を対象とする授業においてそれぞれ同年5月26日、29日に実施された。実施者は経済学部准教授岩間剛城氏。履修者115名のうち57名（50%）、また211名のうち99名（47%）から回答があった。

山形県立米沢女子短期大学は昭和27年（1952）に設置・開学した。米沢市に所在する。学生数は１、2年生合わせて595名（平成27年5月現在）。アンケートは文献情報学・書誌学（司書課程必修科目）の授業において新藤透准教授により実施された。履修者 81 名のうち 76 名から回答を得た（94%）。

尚絅学院大学は明治25年（1892）にアメリカのバプテスト派婦人宣教師ミス・ミードにより開校された尚絅女学会にはじまり、昭和25年（1950）尚絅女学院短期大学設置、平成15年（2003）に共学・四年制化にともない尚絅学院大学となった。学生数は1,927名（平成28年5月現在）。名取市に所在するミッション系大学である。アンケートは東北大学高度教養教育・学生支援機構入試センターの田中光晴講師により同年7月16日に「子どもと地域社会」の授業において実施され、95名のうち92名から回答があった（97%）。

最後に、仙台徳洲看護専門学校は平成22年（2010）に仙台市看護専門学校から承継され開学した若い専門学校である。仙台市に所在し、在校生は142名（平成24年）。アンケートは基礎分野にあたる社会学の授業で、同じく

田中光晴講師により同日実施され、45 名の全員から回答を得た（100%）。以下、各質問と回答数を表にして示す。

1．高校在学時に世界史を履修しましたか。

	はい	いいえ
東北大学	39（85%）	7（15%）
近畿大学１	44（85%）	8（15%）
近畿大学２	76（77%）	23（23%）
米沢女子短期大学	68（90%）	8（10%）
尚絅学院大学	88（96%）	4（ 4%）
徳洲看護専門学校	44（98%）	1（ 2%）
平均	88%	12%

2．1．で「はい」と回答した方に伺います。履修した世界史の科目はどれですか。

	世界史Ａ	世界史Ｂ	わからない
東北大学	15（38%）	25（62%）	0（ 0%）
近畿大学１	21（39%）	29（54%）	4（ 7%）
近畿大学２	34（43%）	39（49%）	7（ 8%）
米沢女子短期大学	43（60%）	28（39%）	1（ 1%）
尚絅学院大学	58（62%）	31（33%）	4（ 5%）
徳洲看護専門学校	27（59%）	13（28%）	6（13%）
平均	50%	44%	4%

3．大学入学時の入学試験（センター試験含む）で地歴・公民の科目を受験しましたか。あてはまるものに○をつけてください。（在学中の大学には限定しません。）

	受験した	受験しなかった
東北大学	39（85%）	7（15%）
近畿大学１	29（51%）	28（49%）
近畿大学２	41（41%）	58（59%）
米沢女子短期大学	58（75%）	19（25%）
尚絅学院大学	42（47%）	48（53%）
徳洲看護専門学校	9（20%）	36（80%）
平均	53%	47%

4．3．で①受験したと回答した方に伺います。そのときに受験した科目はどれですか。（複数回答可）

（ここでは煩瑣になるので世界史と回答した者の人数のみを示して、他は省略する。）

	世界史Ａ	世界史Ｂ
東北大学	0（0%）	18（31%）
近畿大学１	1（2%）	10（21%）
近畿大学２	0（0%）	11（13%）
米沢女子短期大学	1（1%）	14（13%）
尚絅学院大学	3（4%）	8（12%）
徳洲看護専門学校	2（8%）	3（12%）
平均	3%	15%

5．高校で世界史が必修科目なのを知っていますか。

	知っている	知らない	無回答
東北大学	20（43%）	14（30%）	12（27%）
近畿大学１	33（58%）	18（32%）	6（10%）
近畿大学２	43（43%）	48（48%）	8（ 9%）
米沢女子短期大学	48（63%）	28（37%）	0（ 0%）
尚絅学院大学	60（65%）	30（33%）	2（ 2%）
徳洲看護専門学校	23（51%）	22（49%）	0（ 0%）
平均	54%	38%	12%

3-1. 集計結果の分析

以上の 5 つの質問とその回答を分析すると、高等学校で世界史を履修しなかったと回答した者は 12%におよんでいる。これは問題発覚当時（平成 18 年（2006））文部科学省によっておこなわれた調査結果の「全 5,408 校のうち 663 校（12.3%）」という数値に近似しており、われわれのなかの鈴木道也ほか（2016）による東洋大学での調査（4%）、同じく吉原 秋ほか（2016）による岩手県立大学盛岡短期大学部での調査（4～6%）と比較しても相当に大きな数字といえる。とくに近畿大学での第 2 回調査の 23%は第 1 回の 15%からみても無闇に大きい。しかし安井 萠（2011）は、岩手大学において 2006 年におこなった調査での 23%という数字を報告している。そこでは学生の出身県別が議論されているが、われわれの質問紙ではそのデータを取得していなかった。ただし、「2．履修した世界史の科目はどれですか」という質問にたいして、近畿大学の調査では「わからない」と回答した者が 7～8%におよんでいることと考え合わせれば、回答者が 2～4 年生にわたっていたために、履修したかどうかをすでに忘却し、履修していないと回答した可能性もあるだろう。その数をどの程度に見積もるかという問題はあるが、記憶が新しいと推測される東北大学の第 1 セメスターの学生の回答（15%）を参照しても、世界史未履修者は減少しているとはいえ、いぜんとして存在しているといわざるをえない。

世界史 A と世界史 B のいずれを履修したか、という点では、さしあたり世界史 A の平均値 50%および世界史 B の平均値 39%とを基準とすれば、東北大学と近畿大学では世界史 B の比率がやや高く、米沢女子短期大学、尚絅学院大学、および徳洲看護専門学校では世界史 A の比率が高めである。アンケート実施の対象校を便宜的に大規模校と小規模校に分けることは可能であるが、この傾向を単純にそうした学校の規模に関連づけることができるかどうかは不明である。また、「わからない」という回答が想定外に多かった。いずれにしても世界史 A を履修した者は少なくとも 38%以上、多くて 62%、全体の平均では、ほぼ半数の学生はそうだということになる。この

結果は吉原 秋ほか（2016）での数値に近い。一方、東洋大学での「地域史 A（西洋）」の授業履修者を対象とした鈴木道也ほか（2016）では、世界史 A 履修者はわずか20%にとどまっていた（世界史 B は 75%）。世界史 A 履修者は大学において西洋史系の授業を選びにくい傾向がある、と推定するのは早計だろうか。

大学入試の科目選択に関する質問では、地歴・公民科目で受験した者は東北大学と米沢女子短期大学で高い傾向にあるが、平均すると受験した者もしなかった者も約半数ずつになるため、大学入試そのものにかかわることが少なかったとおもわれる専門学校生は除外するとしても、明確な傾向は読み取れない。また、地歴・公民科目で受験した者のうち、世界史で受験した者は、全体としては少数派であるが、世界史 A に比べて世界史 B での受験率が圧倒的に高い。地歴・公民科目で受験するとすれば、10 数%の生徒は世界史を選択し、その場合 A よりも B を選ぶ傾向がある、という程度には推論できそうである。

最後に、高校で世界史が必修科目なのを知っているかどうかという質問には、知っていると回答した者が平均して 54%、知らないと回答した者が 38%であった。いずれの学校でも前者が後者を上回っているといえるが、近畿大学の第 2 回調査においてはわずかとはいえこれが逆転している。ただし、東北大学、近畿大学では無回答が比較的多いので、その数値が誤差になっているかもしれない。かりに無回答分を「知らない」に繰り込めば、その比率は容易にくつがえる。このように回答を「保留」する傾向は、強いて言えば大規模校において顕著であり、反対に、小規模校ではほとんどない。その原因が何に由来するかについては安易な推測を避けねばならないが、少なくとも「知っている」と表明することは、ではなぜ必修とされているかという次の課題を考察するための必須の要件である。質問紙ではこの後に「6．高校で世界史が必修なのをどう思うか」という自由記述欄を設けていたが、筆者はこの部分の疑念を払拭できないので、その自由記述に関する分析については他日を期したい。

4. テキストマイニング分析

質問事項の最後には、「7．世界史を学ぶことはどのような役に立つと思うか」という自由記述欄を設けており、これには実施校のすべてにおいて多数の回答を得た。以下ではこれらの回答に関してテキストマイニングによる分析をおこなう。テキストマイニングとはデータマイニングの手法の応用で、日本語の文章を最小単位の単語に分解する形態素解析と単語の品詞を利用して単語同士の係り受けを抽出する構文解析からなる技術であり、上述のような限界もあるが、単語の出現比率やそのさいの単語分類などから、それぞれの「特徴語」の比較をつうじて、世界史（外国史）学習にたいする学生の期待値を読み解きたいとおもう。ツールには、株式会社ユーザーローカルの提供するフリーのテキストマイニングツール（textmining.userlocal.jp）を使用した。

4-1. ワードクラウドによる比較

まず、東北大学でのワードクラウド（スコアが高い単語を複数選択し、その値に応じた大きさで図示したもの）を示す（図１）。

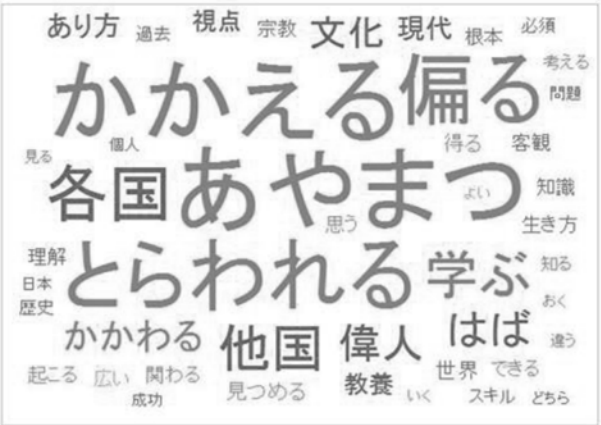

図１：東北大学

また、近畿大学（第1回）では次のようになる（図2）。

図２：近畿大学

この２つを比較すると、東北大学では、「かかえる」「偏る」「あやまつ（「誤って」の一部分）」「とらわれる」「かかわる」など、品詞でいえば動詞が大きく出ており、形容詞に乏しい。一方、近畿大学では「日常生活」「観光名所」「人種差別」などの名詞が目立つ配置になっている。さらに、米沢女子短期大学のワードクラウドでは次のように、「知る」「学ぶ」「つながる」「深まる」などの動詞が頻出している（図３）。

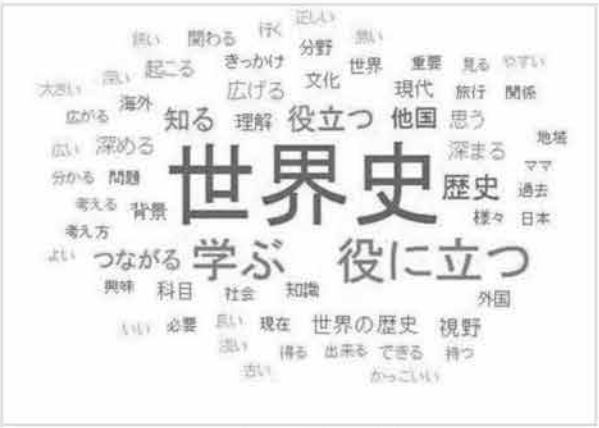

図３：米沢女子短期大学

特徴的な語彙としては、東北大学には「偉人」「教養」「根本」「必須」「成功」などがあり、近畿大学では「生かせる」「ドラマ」「開放」などがあり、米沢女子短期大学では「良い」「浅い」「古い」「かっこいい」などの形容詞も多い。語彙自体がポジティブであれネガティブであれ、ここでは文脈の判断ができないため考慮しない。ちなみに、「ママ」は回答の誤字を修正したさいに筆者が付した符牒である。

さらに、仙台徳洲看護専門学校では次のようなワードクラウドが形作られる（図４）。

図４：仙台徳洲看護専門学校

設問にある用語の「役に立つ（役立つ）」を除外しても、「深める」「広がる」「関わる」「作れる」「話す」「聞く」など、おもに動詞を中心として配置されており、他にも「友人」「出会う」「職業」「恥ずかしい」など、他の実施校には見られない特徴的な語彙がある。世界史学習の抽象的な実用性よりも、具体的な局面を想定しながら回答しているようにおもわれる。

このような分析から判明することは何であろうか。使用されている語彙は決して幅広いものではないとはいえ、それぞれの学校で学習への期待はことなっているということである。たとえば東北大学では、世界史の学習により、既成概念から解放されるのではないかとの期待がありそうである。また近畿大学では、「日常生活」「観光名所」などの単語から、大学生活の延長線上で起こりうる場面での効用を望んでおり、世界史という科目にたいする評価、あるいは「気分」といったものはほとんど認められない。米沢女子短期大学では、よく整った単語の配置から、いわゆる「優等生」的、「集団行動」的な装いも看取されるが、周辺に位置する形容詞からは、世界史学習がもたらす自己変革への期待感が見え隠れしている。そのような期待が徳洲看護学校ではさらに顕著であり、また具体的でもある。

ところで、「グローバル化」という学習キーワードについては近畿大学に「国際化」の単語があることを除けば、どこにも登場しない。世界史学習がグローバル化に対応するものだというイメージに結びついていないのか、あるいは「役に立つと思うか」という設問への回答として適切でないと判断したのか、疑問は深まるばかりだが、機会があればその点もまた追求したい。

4-2. 外国史の授業履修者との比較

次に、同じ質問事項への回答を、外国史の授業を履修する学生とそれ以外の学生とのあいだで比較してみよう。ここでは別に、われわれの一人である畑奈保美が尚絅学院大学の「西洋の歴史」の授業（全学科 1 年生）において平成 27 年（2015）7 月 9 日に実施した同アンケートの集計結果を使用する。学生 277 名のうち 226 名から回答があった（82%）。これを上記の田中光晴講師による同校「子どもと地域社会」の授業での回答と比較する。ただし、ワードクラウドでは近似した配置になったため、①単語分類と②単語の出現比率によっておこなう。

① 単語分類（図５）

尚絅学院大学（子どもと地域社会）にだけ出現	尚絅学院大学（子どもと地域社会）によく出る	両方によく出る	尚絅学院大学（西洋の歴史）によく出る	尚絅学院大学（西洋の歴史）にだけ出現
ママ かかわる 宗教	日本 分かる 見る	思う 知る 世界 できる	歴史 文化 旅行 興味	学べる 持つ 深い
国際社会 比べる	戦争 つく おく いい	学ぶ 役立つ 外国	問題 関わる 海外	様々 時代 世界遺産
コミュニケーション	広がる 出来事 覚える	役に立つ 理解	今後 社会 向ける	背景 関心 感じる 得る
見つめる 原爆 変化	やすい 増える 政治	世界の歴史 知識 いく	必要 つながり	出来る 教養 話題
公務員試験 日本の政治	つながる 深める 関連	世界史 考える 過去		仕事 国際関係 失敗
あり方 日本の文化	広い 遠い 内容	現在 行く 良い		国際 意識 一緒 考え
交易 領地 デモ 定着	知らない あやまつ	日本史 視野 他国		場所 変わる 深まる
行為 断食 成功 マメ	以外 生かす わく	ニュース 知れる 機会		出る 生きる 広げる
環境 見通し 人生	日本の歴史 在り方	関係 起きる 話す		外国人 流れ 教える
手がかり 同時 平行	なかった 地域 はう	繰り返す 勉強 生活		世界情勢
ネタ やり方 特徴	観光スポット			

図５：単語分類

表の左半分が「子どもと地域社会」であり、右半分が「西洋の歴史」である。両端はそれぞれにのみ出現する単語、中央は共通して出現する単語である。ここでは差違に注目する。「国際関係・国際社会」、「生かす・生きる」、「深い・深まる・深める」など、意味としては同じカテゴリーの単語も存在するが、「西洋の歴史」の授業では、「仕事」「意識」「失敗」「広げる」「教える」などが特徴的に出現し、一方「子どもと地域社会」では、「宗教」「コミュニケーション」「原爆」「公務員試験」「交易」「領地」「デモ」「成功」「環境」「人生」などが出現している。後者のほうが、語彙が比較的豊富で、かつ具体的だといえる。反対に「西洋の歴史」では（筆者としては意外であるが）抽象的思考にシフトしているようである。しかしどちらかといえば、明確な差違を認めるほどではない。このことは、学校単位では学生の世界史学習への期待値に大きな違いがない、ということを示しているのかもしれない。

② 単語の出現比率（図６）

単語の出現比率は、単語の絶対数ではなく、両者を足して100%となる割合を表示している。この比率を比較すると、興味深い違いを読みとることができる。「子どもと地域社会」では動詞の出現比率が高く、一方で「西洋の歴史」では名詞の比率がやや高めである。前者では、「学ぶ」「分かる」「見る」「かかわる」「広がる」「増える」「生かす」「話す」「繰り返す」「つながる」「深める」「比べる」「覚える」など、後者では、「文化」「旅行」「興味」「社会」「海外」「ニュース」「背景」「時代」などがそれぞれ60%以上になっている。また、形容詞では「西洋の歴史」だけに出現する単語が圧倒的に多い。「くわしい」「新しい」「おもしろい」「つまらない」「古い」「悪い」「素晴らしい」「よい」「近い」などである。文脈は度外視するが、外国史の授業を履修する学生では、対象への評価の視点を、他方それ以外の学生では、行為とかかわるイメージをより重視しているといえそうである。

5. おわりに

以上、われわれの「高校での世界史履修に関するアンケート」結果の分析により、対象校において①世界史未履修者はいぜんとして平均12%におよんでいること、②履修者のうち世界史Aは平均50%、世界史Bは平均44%であり、学生の約半数は世界史Aを学習していることがわかった。ただし、いずれを履修したか記憶していない者もいた。対象校は大きく分けて東北圏と関西圏に所在していたが、これらの傾向に地域差をとくに看取することはできなかった。

また、③大学入試において地歴・公民の科目を受験した者は平均53%であり、④そのうち世界史Bで受験した者は最大でも31%であった。つまり、10人に2人もいないという状況である。そして、このような明らかな少数派を含む、大多数の学生における⑤世界史学習にたいす

名詞

尚絅学院大学(子どもと地域社会)	単語	尚絅学院大学(西洋の歴史)
67	日本	33
50	世界	50
35	歴史	65
62	理解	38
56	外国	44
56	世界の歴史	44
43	知識	57
29	文化	71
45	世界史	55
47	講義	53
29	旅行	71
38	現在	62
31	興味	69
40	日本史	60
31	問題	69
56	視野	44
69	戦争	31
60	他国	40
24	社会	76
24	海外	76
39	ニュース	61
24	今後	76
100	ママ	0
77	政治	23
69	出来事	31
0	背景	100
0	時代	100
48	機会	52
0	様々	100
31	必要	69

動詞

尚絅学院大学(子どもと地域社会)	単語	尚絅学院大学(西洋の歴史)
50	思う	50
54	知る	46
60	できる	40
62	学ぶ	38
48	役立つ	52
52	役に立つ	48
41	いく	59
80	分かる	20
56	考える	44
77	つく	23
77	おく	23
72	見る	28
36	行く	64
23	関わる	77
100	かかわる	0
77	広がる	23
83	増える	17
0	学べる	100
32	向ける	68
0	持つ	100
87	生かす	13
57	起きる	43
62	話す	38
52	知れる	48
62	繰り返す	38
69	つながる	31
87	あやまつ	13
77	深める	23
100	比べる	0
69	覚える	31

形容詞

尚絅学院大学(子どもと地域社会)	単語	尚絅学院大学(西洋の歴史)
76	いい	24
90	やすい	10
50	良い	50
0	深い	100
71	広い	29
71	多い	29
100	ひどい	0
0	くわしい	100
0	新しい	100
0	大きい	100
0	少ない	100
0	おもしろい	100
0	つまらない	100
0	古い	100
0	悪い	100
0	素晴らしい	100
0	よい	100
0	近い	100
—	—	—
—	—	—
—	—	—
—	—	—
—	—	—
—	—	—
—	—	—
—	—	—
—	—	—
—	—	—
—	—	—
—	—	—

図６：単語の出現比率

る期待は対象校により差違がみられた。端的にいえば、教条的な既成概念からの解放であり、また海外旅行など大学生活の延長線上での効用であり、自己変革への契機としての期待であった。これらの期待値は、あくまでそれぞれの対象校の傾向として浮上してきたものであるが、学生各人のなかにも多かれ少なかれ抱かれているだろう。

一方、⑥「グローバル化」というキーワードは、いずれの学生においてもほとんど意識されていなかった。ただし、このキーワードを別の事相によって理解している可能性はある。最後に、⑦外国史の授業を履修する学生はそれ以外の学生よりも、対象を評価しようとする視点に重きをおく傾向がみられた。

このような結果を踏まえて、われわれが学生の探究心を引きだし、能動的学習をうながすことができるよう準備することはやはり容易ではないだろうが、その関心との接点を見いだすのはそれほど難しいことではないようにおもわれる。世界史（外国史）学習は、学生からある意味ではおおいに期待されているといっていいのではないか。大学の授業は、講義型から実習型へと移行しつつある。一部の高等学校、また、多くの大学図書館においてすでに開始されているアクティブ・ラーニングの取り組みとも協調し、ラーニング（学修）、ライティング（表現）、リサーチ（調査研究）の各コモンズに積極的に関与することが、次世代の育成にも奏功するはずである。

近畿大学経済学部岩間剛城准教授、山形県立米沢女子短期大学新藤透准教授、東北大学高度教養教育・学生支援機構入試センター田中光晴講師、東北大学附属図書館情報サービス課参考調査係長吉植庄栄氏には、本調査へのご協力に記して御礼申し上げます。

なお、本研究は、岩手県立大学学部等研究費（研究課題名：『世界史教育と外国史研究との連携・協働に向けた総合研究―岩手県における世界史教育の現状と課題―』（代表 吉原 秋））から助成をうけたものである。

6. 参考文献

・資料

文部科学省（2006），高等学校における必履修科目の未履修について，
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/07011201/003/011.htm
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/07013003/002.htm

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（2016），次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて，
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm（2017年1月9日閲覧）

日本学術会議　心理学・教育学委員会・史学委員会・地域研究委員会合同高校地理歴史科教育に関する分科会（2011），提言　新しい高校地理・歴史教育の創造－グローバル化に対応した時空間認識の育成－，
http://www.geoedu.jp/GK.pdf（2017年1月9日閲覧）

日本学術会議　史学委員会　高校歴史教育に関する分科会（2014），提言　再び高校歴史教育のあり方について，
http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-t193-4.pdf（2017年1月9日閲覧）

日本学術会議　高校歴史教育に関する分科会（2016），提言「歴史総合」に期待されるもの，
http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t228-2.pdf（2017年1月9日閲覧）

齋藤朗宏（2011），日本におけるテキストマイニングの応用，
http://www.kitakyu-.ac.jp/economy/study/pdf/2011/2011_11.pdf（2017年1月9日閲覧）

・文献

川井正士（2010），生徒の実態に即した「世界史A」の授業改善の試み，高等学校世界史のしおり，帝国書院，1－12

安井 萠（2011），世界史未履修問題と岩手大学生―アンケート調査結果によりながら―，岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 第10号，23－35

加藤信哉・小山憲司（2012），ラーニング・コモンズ：大学図書館の新しいかたち，勁草書房

後藤芳文・伊藤史織・登本洋子（2014），学びの技　14歳からの探究・論文・プレゼンテーション，玉川大学出版部

鈴木道也，吉原 秋，小川春美，安井 萠，小川知幸，畑奈保美，津田拓郎（2016），大学における世界史教育の現状と課題（1）―世界史学習に関する大学生たちの意識調査―，岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 第18号，65－71

吉原 秋，小川春美，鈴木道也，安井 萠，小川知幸，畑奈保美，津田拓郎（2016），世界史履修に関する短大生の意識調査，岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 第18号，59－64

註

1 中央教育審議会の案では、しかしながら18世紀後半以降を具体的対象としており、日本学術会議の提言にある（1）および（2）の時代は扱われない。その点で、より近現代に特化した学習内容を想定しているようである。